

「比較」を検証する —言語学からの比較文化論への提言—*

山内信幸

0. はじめに

本稿では、昨年東北学院大学で開かれた日本比較文化学会第17回大会でのシンポジウム「比較文化論再考」において、比較文化論のいわゆる「入り口論」が展開されたのをうけて、¹ 比較文化論の方法論を確立すべく、言語学を例にとり、「比較」のあり方を再検討するとともに、今後の比較文化論の進むべき道を示唆することを目標とする。

本題にはいるまえに、ひろく「比較文化論」なるものの実質を理解するために、まだ、方法論的にも、内容的にもじゅうぶんな成熟をみていないと思われる「比較文化論」そのものを直接論じるのではなく、便宜上、「比較・文化論」というように、「比較」のあり方と「文化論」のあり方にわけて、いくつかの問題点を指摘してみよう。

まず、「比較」のあり方について考えてみることにしよう。*Longman Dictionary of English Language and Culture* (1992) で ‘compare’ の項目をひくと、“to examine or judge (one thing) in relation to another thing in order to show the points of similarity or difference”² という意味が与えられていて、ここには、「類似点か相違点を示すため」という目的論的立場がまず第一義的にあるように思われる。学問的なディシプリンが確立している学問領域においては、この目的論的アプローチをとることはおそらく妥当であろう。しかし、「比較文化論」という新しい分野には、さまざまな学問領域が学際的にオーバーラップしていて、その混質性こそが「比較文化論」を特徴づけているとする

ならば、「比較文化論」への可能なアプローチのひとつとして、類似点や相違点の存在をあらかじめ前提としているのではなく、あるものと他のものを関連づけて考察・検討した結果、すなわち、「比較」した結果、なんらかの類似点なり、相違点がみいだされるという経験論的立場にもとづくものであっても、なんらさしつかえはないであろう。

また、「文化論」のあり方については、昨年度のシンポジウム発題者の1人である東北学院大学の柴田良孝氏の指摘は傾聴に値する。氏は、「文化論を構築するとき、つまり、なにかのより普遍性をもった発見にたどりつこうとするとき、自然科学的な証明によって可能な場合はさておくとしても、科学的にアプローチするにはどうすればよいのでしょうか」として、これからの「文化論」では、個人による印象批評あるいはたんなる事実の羅列程度の「文化論」ではなく、反証にたえうる「科学的なアプローチ」にもとづく「文化論」の構築を目指すべきであり、そのための方法論の確立が急務である旨を指摘している。このことは、それぞれの既存の学問領域の立場から「文化論」を論ずる際には当然心得ておかなければならないものであり、まだディシプリンの確立していない「比較文化論」にあっては、必要不可欠な視点であるのはいうまでもない。

一般に、ある事象の特徴を明確にするためには、あるものを基準として、他のものと比べるという手法が、しばしば、採用される。本稿においても、比較文化論における方法論の確立にむけて、言語学を例にとり、「比較」というキーワードを軸に、どのような「比較」の手法が考えられうるのか、また、その「比較」によってどのような知見がもたらされるのかを論じることにする。

そもそも、言語学の分野では、2つの言語を比べる場合に、それぞれの言語の属する語族との関連で「比較」と「対照」という術語が厳密に使われてきたけれども、⁴ここでは、「比較」という術語をより広義にとらえて、(a) 同じ（種類の）ものを比べることと異なる（種類の）ものを比べること、

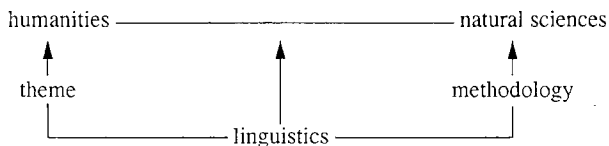
(b) 共時的に比べることと通時的に比べること, (c) ミクロ的に比べることとマクロ的に比べることという, それぞれことなった3つのレベルの「比較」を設定する。それぞれの「比較」において, その基点となるものは, 当然, 異なるけれども, (a) では, 他の学問分野との「比較」によって, 言語学そのものの外枠がおのずと明確に規定されうること, (b) と (c) では, 共時的・通時的「比較」やマクロ的・ミクロ的「比較」によって, 言語学内部のそれぞれの言語理論の特徴づけが明確になされうるだけでなく, 言語学あるいは言語理論の進展は, ある種の連続性 (continuity) を保ちながらも, そのなかに周期的なテーゼの交替 (cyclicality) というプロセスがみられることを指摘する。具体的にいえば, 言語学と他の学問領域との関連, 言語学あるいは言語理論自体の歴史的な位置づけ, さらに, チョムスキーに代表される生成文法の理論的変遷などを検討することがふくまれることになろう。最終的には, これらの議論によって, 従来からみられた静的な「比較」の視点のみならず, 動的な「比較」の視点が言語学の座標軸の定位化に有効であることを主張する。

1. 異なるものとの「比較」——言語学と他の学問領域との関連

本節では, 異なるものとの「比較」の例として, 言語学と他の学問領域との関連をおおまかにみてみることにしよう。

まず, 言語学そのものの学問的性格を規定してみよう。従来から, 言語学は, 主題という点では人文科学に近く, 方法論という点では自然科学に近いものと位置づけられ, (1) に示すように, いわば, 人文科学と自然科学をつなぐかけ橋のような役割をはたすものとみなされてきた。

(1)



つまり、言語学の扱うテーマは、人間を人間たらしめている言語という素材を対象とする点で、文学と同様にきわめて人文科学的なものであり、他方、その方法論は、資料の収集 → 観察 → 分析 → 仮説にもとづく一般化 → 他のデータとの検証 → 一般化の修正 → 理論の構築といったプロセスにより、厳密な経験的手続きにもとづいておこなわれるという点で、自然科学がとる手法を採用している。すくなくとも、方法論上からみれば、言語学が自然科学の一部をなすことは明白であろう。

それでは、言語学と自然科学に属する他の分野との関連をチョムスキー (N. Chomsky) 自身の著作やチョムスキーがハイブレッツ (R. Huybregts) とリームズディーク (H. van Riemsdijk) との鼎談などのなかで披瀝している見解を簡単にまとめてみよう。

まず、言語学と心理学との関連においては、チョムスキーは言語学を心理学あるいは認知科学の1分野とみなしてきたことを指摘しておかなければならない。1950年代当時趨勢を誇っていた行動主義の勢いにかげりがではじめた頃、その代案として提案されたチョムスキーの言語理論は、ある意味で、言語学と心理学という個々の伝統的な学問領域の垣根をとりぞくに貢献したと考えられる。すなわち、文法を人間が一次言語資料をもとに構築することのできる諸原理の心理的体系であるとする言語観は、人間の種に固有の能力を研究する認知心理学に包含されているのは明白であろう。このような立場は、次のチョムスキーの見解にも如実にあらわれている。

- (2) I would like to think of linguistics as that part of psychology that focuses its attention on one specific cognitive domain and one faculty of mind, the language faculty. Psychology, in the sense of this discussion, is concerned, at the very least, with human capacities to act and to interpret experience, and with the mental structures that underlie these capacities and their exercise; and more deeply, with the second-order capacity to construct these

mental structures, and the structures that underlie these second-order capacities.⁷

つぎに、もうすこし学問領域の枠をひろげて、認知というレベルで言語学の定位化をはかってみよう。チョムスキーは、まず、従来からある精神 (mind) と身体 (body) という伝統的な区分には与せず、精神と身体の一部である脳 (brain) を「抽象化」という作用のレベルで同一視している。⁸ 彼によれば、言語学とブレインサイエンス (the brain sciences) の依存関係は相互的であり、⁹ 両者の「抽象化」のレベルに多少の異同はあっても、¹⁰ 両者の結びつきが確定すれば、精神の研究がやがては自然科学の研究の主流へと同化されていくという観測が述べられている。少し長くなるが、該当部分を引用してみよう。

(3) There is a common enterprise: to discover the correct characterization of the language faculty in its initial and attained states, to discover the truth about the language faculty. This enterprise is conducted at several levels: an abstract characterization in the theory of mind, and an inquiry into mechanisms in the brain sciences. In principle, discoveries about the brain should influence the theory of mind, and at the same time the abstract study of states of the language faculty should formulate properties to be explained by the theory of the brain and is likely to be indispensable in the search for mechanisms. *To the extent that such connections can be established, the study of the mind — in particular, of I-language — will be assimilated to the mainstream of the natural sciences.*¹¹ [italics mine]

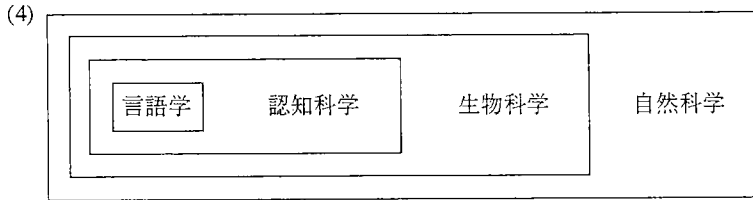
当該体系の本質的な理解にむけてはさまざまなレベルが存在するけれども、より高次の「抽象化」の進んだレベルにおいては、チョムスキーは言語

学と人工知能の研究との類似性をみいだす可能性も示唆している。チョムスキーの理解によれば、人工知能の研究のなかでも、神経生理学や心理学などの知見も援用した視覚についての Marr and Nishihara (1978) の研究は、“developing systems of representation and levels of representation which will on the one hand have a basis in physiology, if they can find it, and on the other hand will account for important perceptual phenomena”¹²であり、彼らが目指している心理モデルや計算機のモデルの立案によって、当該体系の一般的特徴やその機能を考察し、その本質は何であるかを抽象的に特徴づけしようとするアプローチは、まさしく言語学の目指す立場と軌を一にするものである。

さらに、議論をより包括的な範囲にひろげて、言語学と自然科学とのかかわりあいをみてみることにしよう。(3)でもみたように、チョムスキーは言語学を自然科学の延長線上に位置づけようと考えているが、具体的に、生物学を例にとりて考えてみた場合でも、その本質および方法論において、類似性をみいだすのはけっしてむずかしいことではない。たとえば、自然界に存在するさまざまな現象は単純な組織原理から説明が可能であるとする Mandelbrot (1977) の研究や生物のもつ特徴の多くは、種の淘汰などとはまったく無関係で、その種が物理的に存在するための条件とかがわりあいがあるとすると Thompson (1961) の研究は、言語学における文法を最小限の文法規則や原理に還元しようとする試みや言語を人間という種に固有の特質であるとする立場とまさしく同じである。しかも、言語学と自然科学とは、方法論においても、類似しているというチョムスキーの主張をうけて、Botha (1989) では、(a) 洞察の深さを探るという基本的な目標、(b) 「洗練された」実在主義という実在論的位置づけ、(c) 「寛容な」論駁主義、(d) 理想化という方法論的手段の4つの観点からの共通点が指摘されている。¹³

いままでみてきたように、言語学と関連領域との関連では、それぞれの学問的ディシプリンの本質とその方法論の両面からの検討が必要であり、それぞれ異なる学問領域との「比較」はおのずと言語学の輪郭を明確化するのに

貢献しているといえるであろう。¹⁴ この節をしめくくるにあたって、言語学の相対的な位置づけは、Botha (1989) にならって、(4) のような簡潔な図で示すことができるであろう。



15

2. 通時的な観点からの「比較」—History of Linguisticsから Historiography of Linguisticsへ

本節では、共時的な観点からではなく、通時的な観点からの言語研究のあり方をおして、「比較」といった視点をもたらす成果について考察する。その際、言語学の歴史についての伝統的なアプローチである History of Linguistics の知見のみならず、ケルナー (E.F.K. Koerner) によって提唱された比較的若いアプローチである Historiography of Linguistics の視点を援用しつつ、19世紀から20世紀という時代の移り変わりのなかでの言語研究の発達史に焦点をあて、そのなかに一種の連続性と交替の原則を指摘する。

まず、Koerner (1974, 1995a, 1995b) にしたがって、History of Linguistics および Historiography of Linguistics の輪郭をおおまかにみでみることにしよう。

そもそも、言語研究の歴史を記述する伝統は、ドイツ語圏、ロマンス語圏、スラブ語圏での研究に端を発し、その長さはわずか200年たらずである。¹⁶ また、厳密な意味での学術研究として、たとえば、博士号の学位取得の研究対象として扱われるようになってからは、ほんの30年たらずしか経過していない。Koerner (1995a) によれば、200年にわたる旧来の言語研究史の研究を区

分してみると、おおきくわけて、次の3つタイプに分類されるという。

まず、第1のタイプは、Benfey (1869)の研究に代表されるように、“the type of history written at a time when a particular generation or an individual representing the ideas, beliefs and commitments of his or her generation to a significant extent is convinced that a desired goal has been reached and that subsequent work in the field will mainly be concerned with what T.S. Kuhn has referred to as ‘mopping-up operations’”¹⁷というもので、その理論的枠組みは周知徹底され、方法論も、改訂すら考慮する必要もないほどに確定されたものとみなされている。そのため、このタイプの言語研究史は、言語研究の発達を独立した、非線的なものとしてとらえられていることになる。

第2のタイプは、Delbrück (1880)の研究のように、特定の言語理論や陣営の立場を擁護する“the intention on the part of an individual usually in his thirties (not late forties or above, as is generally the case with the first type), again representing a particular group, to a campaign opposing previously cherished views and still prevailing doctrines”¹⁸によって特徴づけをすることができる。つまり、このタイプの言語研究史はどうしても「宣伝的 (propagandistic)」になってしまい、それ以前の言語理論や陣営の不備を指摘することで、みずからの主張の正当性を唱えるものにならざるをえず、言語研究史上からみれば、過去の研究成果の集積ではなく、あくまで不連続なものと位置づけられる。

第3のタイプは、上述の第1のタイプや第2のタイプとは異なり、“neither to advocate a particular framework or ‘paradigm’ nor to attempt to provide an argument in favor of a scientific revolution within the discipline”¹⁹ように意図されたもので、たとえば、言語の本質について古代ギリシアから現代にいたるまでの西洋の言語思想の変遷を記述した Arens (1955)の研究などがその代表的なものであろう。このタイプは、言語研究史をひとつの発達のなかでとらえ、過去の研究の知見をも重視する穏健なアプローチではあるが、どうしても、その記述方法は非常に個人的なレベルの選択にとどまってしまうという

欠点をもっている。

そこで、Koerner (1974, 1995a) はこれら3つのタイプにかわる第4のタイプとして、“the presentation of the linguistic part as an integral part of the discipline itself and, at the same time, as an activity founded on well-defined principles which can rival, in terms of soundness of method and rigor of application, those of linguistics itself”²⁰のようなアプローチを提案し、これを‘historiography of linguistics’²¹と名づけた。このあたらしい名称には、たんに言語研究史の事実のみを記録するのではなく、その背後にある一定の「流れ」を意識して、客観的な原則にもとづいて書かれたものであるという点で、‘chronicle’ではなく‘history’であり、しかも、従来の言語研究史のアプローチをもこえるという意味では、‘history’ではなく‘historiography’²²とみなそうとするケルナーの意図が明確に読みとれる。²³

それでは、ケルナーのいう‘historiography of linguistics’にもとづいて、19世紀から20世紀という時代の移り変わりのなかでの言語研究の発達史を眺めた場合、そのなかに一種の連続性と交替の原則を読みとることができることをみてみよう。

長らく文学への隷属物としてしか扱われてこなかった言語学に、独立した「科学」としての地位が与えられたのは、通常、19世紀の初頭と考えられている。しかしながら、近代言語学の息吹きは前世紀後半に感じとることはじゅうぶん可能であり、1786年におこなわれたジョーンズ卿 (Sir W. Jones) の「ヒンズー語について (“On the Hindus”）」という講演にその象徴的な意義を認めることができる。彼の研究は、サンスクリット語とヨーロッパ諸語との関連性について具体的に論じたもので、それまでおこなわれてきた中世的な言語の本質にかかわる思弁的なアプローチとは異なり、いわゆる、歴史主義にもとづく比較言語学という新しい研究法の可能性をひらくものであった。

サンスクリット語の発見が契機となってインド・ヨーロッパ祖語の存在を

推定することになった比較言語学の誕生は、やがて、サンスクリット語とヨーロッパ諸言語との関連性について、音変化のレベルでは「グリムの法則」などでしられるグリム (J. Grimm) の研究や形態論のレベルではポップ (F. Bopp) の研究をうみだすにいたった。彼らによって培われた比較言語学の基礎は、のちに、シュライヒャー (A. Schleicher) によって統合されることになる。彼の説は比較古生物学におけるキュヴィ (G. Cuvier) や進化論の提唱者ダーウィン (C. Darwin) らの自然史観とあいまって、あたかも一生物が進化していくように、言語も生まれ、成長し、やがて死んでいくというような言語観を喧伝するようになった。さらに、彼は、言語は生きた有機体であって、人間からは独立して、その発展の筋道は生物学的な進化法則にしたがっていると考え、人間の家系図のように、言語の系統図をも作成した。

しかし、このような言語観は、一見すると科学的実証主義に支えられているようにみえるけれども、生物学的あるいは歴史法則的なさまざまな視点を混在させ、理想的言語としての有史以前の祖語を実体として無意識に仮定していたため、その言語観の基盤は、不確定で、脆弱なものでしかありえなかった。やがて、シュライヒャーの、いわば、非科学的な言語アプローチに非を唱えるグループとして、ブルーグマン (K. Brugmann) やオストフ (H. Osthoff) らの青年文法学派とよばれる一群が登場し、彼らは、観察可能な現代語をその研究基盤にすえ、音を主たる研究対象として、観念論的ではなく、実証主義的な方法論を確立した。

スラブ語学者レスキアン (A. Leskien) の造語とされる「音法則に例外はない (Die Ausnahmslosigkeit der Lautgesetze.)」という彼らの主張は、その主張の強さのみならず、この表現が一種のスローガンのように一人歩きしてしまい、また、グリムやポップ以来の比較言語学の成果を自分たちの研究成果と盲目的に同一視しているとする誤解をうみだしてしまうことになった。しかしながら、今日的な見地から彼らの唱えた音法則をながめれば、それらは、

言語事実であるだけでなく、言語科学としての一連の仮説群の集約とみなすことができるであろう。つまり、この時期における最初の仮説は、「グリムの法則」であり、その例外は、「ウェルナーの法則」によって解決をみた。さらに、音法則の行きづまりは、現代語の観察・分析をとおして、当時は方法論的に異質なものとみなされ、「誤れる類推 (false analogy)」とまで称された「類推」と歴史的な変化にもとづく音法則の不規則性を「借用」にその解決策をもとめたことによって、解消されるにいたった。このように、音法則とその背後に働いているとみられる類推と借用との関連を明確にすることで、音法則そのものの方法論とその適用範囲が確定したとみなすのは妥当なことであろう。

当時の言語研究をとりまく状況のなかでは、上述のような認識は、残念ながら、一般に流布していなかったため、彼らの音法則の絶対性は曲解され、19世紀末のヨーロッパにおける言語研究の模索的な研究状況²²がうみだされたのは想像にかたくない。このような閉塞状況に風穴をあけ、真の意味で、言語学の科学的対象や方法論を厳密に規定し、言語学そのものの自律性を高める役割をになうのは、20世紀になってからソシュール (F. de Saussure) の登場を待たねばならなかった。

ソシュールの言語理論の現代言語学にたいする最大の貢献は、a) 対象の明確化、b) 厳正な方法論の確立、c) 独創的な記号理論の援用をあげることができよう。彼は二元論のもとづき、まず、言語活動を「ラング (langue)」と「パロール (parole)」にわけ、その社会性に注目したうえで、分析の対象をラングに限定した。また、彼は、言語の状態の位相を示すために「共時的 (synchronic)」, 言語の変化の位相をとらえるために「通時的 (diachronic)」という新しい用語を案出し、前世紀の比較言語学のなかに混在してみられた「状態」と「進化」という対立する概念をみごとに浮き彫りにすることに成功した。さらに、彼は、言語記号のもつ恣意性や線条性を指摘し、言語学を記号学のひとつとして位置づけ、古代ギリシャ以来の言語研究がおかれてき

た隷属的な立場を打破して、科学としての言語学の独立を確保した。

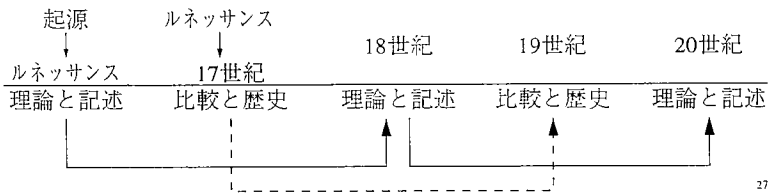
ソシュールの言語観を手短にまとめるなら、“at the heart of language lies a structured interrelationship of elements characterizable as an autonomous system”²³ というものであり、この「構造主義 (structuralism)」の本質ともいえる考え方は、ヨーロッパにおいて、直系のジュネーヴ学派はいうにおよばず、プラグ学派、コペンハーゲン学派をはじめメイエ (A. Meillet) からマルティネ (A. Martinet) にいたる重要な言語学者たちに影響をあたえたばかりではなく、アメリカの構造主義にも少なからぬ貢献をなした。さらに、生成文法の創始者であるチョムスキーにおいてすら、ソシュールの洞察は脈づいており、²⁴ たとえば、言語研究の対象として設定した competence と performance の峻別は、ソシュールの langue と parole からの伝統であると指摘するだけでもじゅうぶんであろう。

また、アメリカ構造主義と生成文法との関連をみってみると、方法論的には、両者はまったく相いれないものとその当時は理解されていた。1940年代から50年代のなかばにアメリカ言語学界を支配していた「構造主義言語学」は、「言語学は直接観察可能な言語現象にもとづく帰納的一般化の集成でなければならず、その理論的言明は観察可能なものだけに言及する言明に還元されるものでなければならない」とする見解に依拠し、その分析の手順は、音韻、形態、文法の各レベルにおいて要素の設定と要素相互間の分布記述という2つの手段の反復であり、その際、意味の扱いは排除されたままであった。ソシュールのいう「記号」の2面性—シニフィアン (signifiant), シニフィエ (signifié) —のうち、後者をそぎ落とした形で、言語を記述しようとしたために、やがてみずからの弱点を露呈するようになり、チョムスキーによって、「表層的な分類論でしかありえない」と一蹴されてしまったのである。しかし、今日的視点から両者の方法論上の連続性をあえて探ろうとすれば、たとえば、チョムスキーが、科学に不可欠な「理想化」の実現にむけて、理想的な話し手と聞き手という存在を設定したことは、アメリカ構造主義が採

用した科学的手続きの厳正さの延長上に位置づけることもできなくはないであろう。

以上、ケルナーのいう ‘historiography of linguistics’ の視点にもとづいて、おおまかに19世紀から20世紀にかけての言語研究の流れを概観してきたが、それぞれの時代における同時代的な視点ではみおとされがちであった言語研究の目的論的目的や方法論の進展が、いわば、累積的な結果として、一種の連続性のなかに生じてきていることが指摘されよう。²⁵ さらに、19世紀と20世紀においてみられた「比較と歴史」vs「理論と記述」というパラダイム交替現象が、コセリウ(1979)も指摘しているように、²⁶ もっと長い時間的推移のなかで言語研究史を眺めた場合にも適用されうることを示すことで、この節を終わることにしよう。

(5)



27

3. ミクロ的な観点からの「比較」——生成文法の位置づけと生成文法内での理論的変遷

本節では、チョムスキーの言語学の位置づけを生成文法の発展というミクロ的な視点から考察し、チョムスキー言語学の定位化をはかるとともに、その理論的変遷のなかにも、一種の「交替」がみられることを指摘する。

まず、チョムスキーの理論が言語学に革命的影響をおよぼしたとされる見解²⁸を支える根拠として、文法を言語理論ととらえ、その理論の構築と評価

にあつては、自然科学と同様に、演繹的な方法論に則って分析可能であることを示し、また、分析の対象を開いた体系である統語論にすえたことで、言語の創造性の解明に大きな貢献を果たしたことがあげられよう。とりわけ、生成文法という新しいパラダイムの導入は、その真骨頂であった。

人類言語の研究についてのいかなるアプローチも、「文法は明示的でない限りならぬ」とする要件をみたすかぎり、生成文法的アプローチといえる²⁹もので、逆に、この「明示性」の要件にとらわれないアプローチは非生成文法的アプローチということになる。つまり、科学的分析に必要とされる明示性の有無は方法論上の問題に帰することになり、両者のアプローチの決定的な相違は、Botha (1989)によれば、“not in regard to WHAT is claimed about natural language(s), but rather in regard to HOW the claims are expressed”³⁰ということになる。

次に、方法論的には、おなじように、生成文法のパラダイムにもとづいたアプローチをとっていながら、チョムスキー的な生成文法と非チョムスキー的な生成文法を峻別するのはなになのかを考えてみよう。

チョムスキーは言語の知識についての基本的な問いとして、次の3つをあげている。

- (6) a. What constitutes knowledge of language?
- b. How is knowledge of language acquired?
- c. How is knowledge of language put to use?³¹

まず、第1の問いは、言語は有限の手段を無限に使用できる体系であると考へたドイツの言語学者フンボルト (W. von Humboldt) にちなみ、「フンボルトの問題」とよばれるもので、チョムスキーは、これにたいして、解答を人間の心／脳のなかにもとめ、言語の知識をいくつかの規則からなる複雑で抽象的な体系にとらへた。

そして、この問いはただちに第2の問いへとつながり、チョムスキー的な生成文法によるアプローチにおいて本質的な問題と位置づけられた。この「人間は、外界との接触が短く、個人的でかざられているのに、どのようにして多くのことを知りえるのか」という問いは、プラトンの故事にちなみ、「プラトンの問題」とよばれている。チョムスキーは、この問いには、私たちの知識のある面は生得的なもので、遺伝的に決定された生物学的な形質の一部であるという考え方で答えている。

第3の問いは産出の問題と知覚の問題にわけることができるが、前者の問題はとりわけ「デカルトの問題」とよばれている。第2の問いにたいする解決策として、言語習得を可能にする要因を人間という種にあたえられた生得的な精神的能力に帰する考え方は、この第3の問いの中心課題である「言語の創造的な使用」をも説明可能にするものであり、チョムスキーは人間に備わっているこの能力のことを‘language faculty (言語機能)’と名づけ、生成文法の究極の目的は、この言語機能とはなにかをアブダクションを手がかりとする演繹的アプローチによって説明するところにあると考えた。

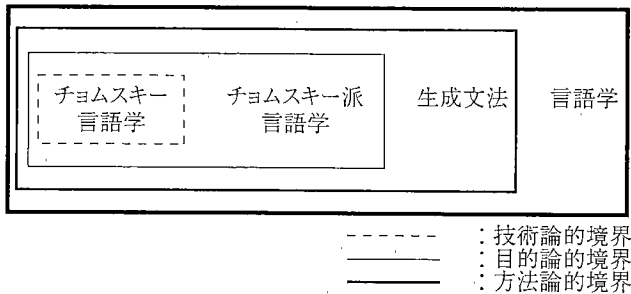
これとは逆に、非チョムスキー的な生成文法を特徴づけるならば、上の第2の問いを言語研究の根本的な問題ととらえずに、しかも、その解決策を人間の精神作用にもとめないという点に集約できるであろう。

それでは、最後に考察すべき問題は、チョムスキーと方法論的にもその問題設定にも同じ立場をとりながら、チョムスキー言語学とチョムスキー派言語学をわかつものは実際に存在するのであろうか。Botha (1989) は、言語構造の記述における「変形規則」の役割のとらえかたの差にもみられるように、両者をわかつ鍵が言語構造の記述における技術論的な側面に帰することを示唆している。¹⁴ チョムスキー自身もこの30数年の間にさまざまな理論的変遷を経験し、数多くあった変形規則は、変形のもつ方の縮小という共通の目標のもとに、いまでは、「任意の範疇 α を任意の位置に移動せよ」という‘move- α ’というひとつの規則に収斂された。これはチョムスキーにとって、

変形規則そのものが彼の理論の中核をなすものではなく、たんに形式的一般化を実現させるための利用可能な装置のひとつとしか考えていないからである。その意味で、彼の目指す言語研究の方法論や問題設定が終始一貫しているのとは対照的で、技術論的な面で、彼の仮説がたえず改訂をくりかえしていくのは驚くに値しないのである。一方、チョムスキー派言語学に属する研究者は、みずからの技術論的側面において、チョムスキーのように顕著な変遷をとげていないというように特徴づけることができよう。

以上みてきたように、チョムスキー言語学を正当に位置づけるには、生成文法内でのミクロ的な「比較」によって、その方法論、目的論、技術論という3点からの検討が必要であり、生成文法的アプローチと非生成文法的アプローチとの「比較」、チョムスキー的な生成文法と非チョムスキー的な生成文法との「比較」、そして、チョムスキー言語学とチョムスキー派言語学との「比較」によって、チョムスキー言語学の領域は次のように示される。

(7)



最後に、生成文法の発展のなかにも、もしあるとすれば、どのような連続性と交替の原則がみいだされるであろうか。Newmeyer (1991) の見解を参考にしながら、若干の考察をくわえてみよう。

Newmeyer (1991) は、生成文法の歴史をたんに 'linear progress-through-

accumulation view³⁴にもとづいて眺めるのではなく、それぞれの連続した発展のなかで、‘rule-oriented’な時期と‘principle-oriented’な時期が互いに交替してあらわれるという‘more cyclic interpretation’³⁵に依拠して、議論を展開している。生成文法の研究として、規則にもとづいた動機づけと原理にもとづいた動機づけの両方が互いに相補的な役割をはたしているのがもっとも望ましいが、あえて、その主たる関心がどちらにおかれているかということで、前者の時期は、“if the generally accepted central task is seen to be to propose, motivate, or argue against the existence of language-particular”³⁶の場合、後者の時期は、“if mainstream research focuses on motivating principles of UG”³⁷の場合と規定されている。

生成文法の理論的変遷を概観した場合、Newmeyer (1991) の分類にしたがえば、次の(8)のように、大きく4つに分けることができる。ここでは、理論的変遷を特徴づける理論名または仮説名、そのもっとも優勢であった時期、そして、その契機となった代表的な研究があげられている。

(8)

a. 初期生成文法	1957-67	Chomsky (1957)
b. 生成意味論	1967-72	Katz and Postal (1964)
c. 語彙論的仮説	1972-80	Chomsky (1970)
d. G B 理論	1980-	Chomsky (1973)

まず、生成文法の記念碑的研究ともいえる Chomsky (1957) が出版されて以降、いわゆる、初期の生成文法の時期にあたる10年間は、アメリカ構造主義言語学が説明しきれなかったさまざまな言語現象にたいしての解決策として、数多くの変形規則が提案された時代として、‘rule-oriented’な時期と特徴づけられる。この時期は、変形規則をともなう言語理論の観察的妥当性や記述的妥当性についての議論に費やされた時代であり、生成文法の方法論の

レベルからみれば、説明的妥当性をもつ言語理論の構築を目指しているのではなく、変形という手段を用いた（英語という個別言語の）言語現象の記述に拘泥していた時期であった³⁸といっても過言ではあるまい。

個別の変形規則の議論に終始した‘rule-oriented’な時期が10年を経ようとした頃、あくまで変形規則の修正ではありながら、より包括的な観点を導入しようとする、いわば、‘principle-oriented’な方向へ向かう研究がいくつか発表されるようになった。のちの理論的変遷にも重要な影響を与えたものとして、たとえば、削除や移動といったいくつかの変形規則を「島の制約 (island constraint)」という概念からとらえなおそうとした Ross (1966) の研究やそれまでの代名詞化変形 (pronominalization) では扱いきれなかった現象について、「交差の原理 (cross-over principle)」によって一般的な解決をはかろうとした Postal (1971) の研究があげられる。

このように、いくつかの規則をより包括的な制約や原理といったものに収斂させようとする努力は、あくまで、技術論的な議論の範疇にはいるものであるが、その背後には普遍文法の構築が意識されている。ちょうどこれらの研究を契機として、70年代前半に、「生成意味論 (generative semantics)」³⁹の名でしられる文法の表示のレベルにかんする重大な議論が展開されるようになった。

文法の統語部門と意味部門の関係でみれば、Chomsky (1965) で提示されたいわゆる「標準理論 (standard theory)」では、深層構造から意味解釈規則によって意味表示が与えられ、さらにその深層構造は、変形規則によって表層構造と結びついているものとされた。それにたいして、生成意味論では、Katz and Postal (1964) において主張された「変形規則は意味をかえない」とするいわゆる「カツツとポスタルの仮説 (Katz and Postal Hypothesis)」を敷衍し、標準理論における深層構造よりもより深く、より抽象的な構造を設定し、意味表示が文派生のもっとも基底となる構造とさだめ、意味表示は変形規則によって、直接、表層構造に結びつけられるとされた。つまり、生成意

味論では、深層構造も意味解釈規則も放棄されたのである。生成意味論側の主張する方法論的な優位性は、言語理論の記述に必要な表示のレベルは、意味表示と表層構造のみで、これら2つの構造を1つの変形規則で結びつけているということであり、違うレベルの深層構造や異なった文法規則である意味解釈規則を設定する標準理論に比べて、より簡潔な文法理論であるという点にある。生成意味論の枠組みで規定された変形規則のなかには、統語的な動機づけがじゅうぶんなされていない「変形」もあり、その主張するところはかならずしも正しいものとはいえないが、意味表示を決定するのが統語構造のどのレベルであるのかという問題にかんして、生成意味論が生成文法のその後の理論的展開に与えた影響は甚大であった。深層構造が意味解釈にはたす役割は、初期理論、標準理論、拡大標準理論というように理論的發展をとげていくなかで、次第に縮小されていくが、生成意味論は、ちょうど、標準理論から拡大標準理論への発展段階に提唱されたアンチテーゼとして位置づけられる。

このような‘principle-oriented’な方向が模索されていたなかで、70年代なかばまでには、変形規則の内容にかかわる議論というよりも、変形規則そのもののあり方にかんする議論がかわされるようになり、第2の‘rule-oriented’な時期を迎えることになる。ここでの主たる論点は、ある統語現象を変形部門で扱うか、あるいは、基底部門で扱うかという問題に集約されるが、一般に、前者は「変形論的仮説 (transformationalist hypothesis)」, 後者は「語彙論的仮説 (lexicallist hypothesis)」とよばれている。

Chomsky (1970) においてはじめてその概要が示された語彙論的仮説は、たがいに関連する名詞と動詞のあいだにみられる「不規則性」をとらえるために提案されたもので、たとえば、派生名詞化変形 (nominalization) の特徴を説明するために、変形部門の諸規則を拡大・強化せずに、基底部門にある書き換え規則や語彙目録などの諸規則によって説明しようとする。この語彙論的仮説に依拠すれば、動名詞的名詞化と派生名詞化とのあいだにみられる相

違点を、それぞれの名詞化に与えられた基底構造の違いに帰することができ、過剰な変形規則の導入を阻止することが可能になる。このように、語彙項目間にみられる統語的・意味的関連性をとらえるために、基底部門の整備・充実を目指した語彙論的仮説は、あくまで、その根拠を基底部門での諸規則においたという点で、‘rule-oriented’なものであるが、他方では、変形そのものの存在、ひいては、文法の体系そのものを問い直す契機にもなった。

80年代にはいると、生成文法は、説明的妥当性をもつ理論となるべく、理論的な大変革をとげるようになる。60年代後半になされた種々の変形規則をより包括的な観点からとらえなおそうとする一連の研究を‘principle-oriented’な指向と規定したが、この時代における第2の‘principle-oriented’な時期は、その指向性の方向や程度において、第1の時期とは、本質的な違いを有するものであった。

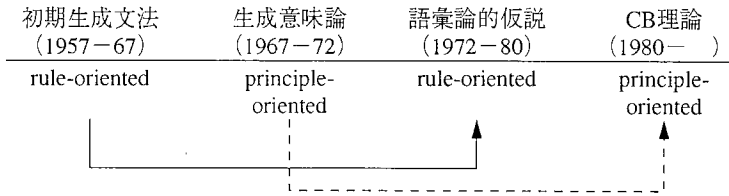
‘rule-oriented’な指向から‘principle-oriented’な指向への移行は、その萌芽をはやくも1973年にだされたチョムスキーの論文にみいだすことができるが、本格的な位置づけは、そのアプローチの名称にもなっているChomsky (1981)の公刊を待たねばならない。GB理論とよばれるこの文法理論では、語彙部門、統語論、解釈部門が規則体系とされ、また、有界理論、統率理論、束縛理論などが原則体系として規定される。この理論では、規則体系の表現力は極限まで制限され、原則体系が、各規則部門の適用、それにとまなう統語構造の派生や統語表示のレベルを制限するとされている。諸原則をひとつの体系として理論的に整備したことは、チョムスキーが言語の知識にかんする第1の問いとしてあげた課題にたいする解決策であり、また、第2の問いである言語習得についての問題は、言語獲得に際して経験にもとづいて決定される値として「媒介変数 (parameter)」という概念を導入して説明しようとした。チョムスキー自身がみずからの文法理論を「原則・媒介変数アプローチ」とよぶように力説していることからあきらかなように、⁴⁰「原則」と「媒介変数」は、GB理論においてはともにきわめて重要な概念と位置づ

けられている。従来の理論はあくまでいくつかの「規則」の体系からなると考えられていたのが、より抽象度の高い、説明的妥当性をもった普遍的な「原則と媒介変数」からなる体系である主張するGB理論は、'principle-oriented'な指向のひとつの到達点といえるであろう。

さらに、チョムスキーの理論は、'principle-oriented'な指向を一層押し進め、たえず理論的修正をくりかえしながら、発展し続けている。たとえば、Chomsky (1989)で示された派生にかんする提案、すなわち、文の生成において複数の派生の可能性がある場合、もっとも労力の小さい派生が採用されるとする「経済性にかんする原理 (principle of economy)」が発展的にうけつがれ、Chomsky (1992)では、文法の基本的デザインには「最小主義 (minimalist)」という特徴があり、原則や派生、表示のレベルはより少ない方向で構成されるべきであると主張されている。たとえば、Chomsky (1986)などで示されていた文法の表示レベルは、D 構造、S 構造、LF、PF とされていたが、「最小主義者プログラム (minimalist program)」では、D 構造も S 構造も放棄され、LF と PF のみのレベルだけになっている。また、「 α 移動」とよばれる変形規則も破棄される可能性が提案され、WH 移動については「コピー理論 (copy theory of movement)」に、NP 移動については「連鎖形成 (form-CH)」にとりこまれている。

以上みてきたように、生成文法の理論的發展には、最終的に普遍文法の構築を目指しつつ、規則 (原則)、派生、表示のレベルにかんして、明示性や簡潔性を高める努力がなされ続けている。⁴⁾そして、次の (9) に示すように、生成文法内部においても、ある種の交替の原則がみいだされ、'rule-oriented'な時期と 'principle-oriented'な時期が互いに交替してあらわれるのはきわめて興味深いといえよう。

(9)



4. おわりに

本稿では、言語学という学問領域の特徴を明確にするために、「比較」のあり方を再検討し、言語学と他の学問領域との関連、言語学あるいは言語理論自体の歴史的な位置づけ、さらに、チョムスキーに代表される生成文法の理論的変遷などを検討することによって、他者とのさまざまなレベルの「比較」が、言語学の座標軸の定位化、すなわち、言語学そのものの外枠の規定とその内実の明確化に寄与しうることをみてきた。さらに、それらの「比較」とおして、科学の進歩に不可欠なテーゼとアンチテーゼとの交替というプロセスが、言語学あるいは言語理論の発展のなかにもみいだされうることを指摘した。

従来から主張されてきた静的な「比較」の手法とあいまって、交替のプロセスという「循環の原則」にもとづいた動的な「比較」の視点は、今後の言語学が進むべき方向性についてなんらかの示唆を与えるだけでなく、比較文化論の方法論の確立にも大きく貢献するものと期待される。

注

*本稿は、1996年6月8日就実女子大学で開かれた日本比較文化学会第18回大会シンポジウム「比較文化学の領域」において、「比較」を検証する——一般言語学の立場

から—』というタイトルで口頭発表した原稿を加筆・修正したものである。当日司会の労をおとりくださった同志社大学の石黒昭博先生には、まずもってお礼申し上げたい。また、フロアーからもさまざまな有益なコメントをいただき、ここにあらためて、感謝の意を表したい。

1 まず、日本比較文化学会の歴史をひもといてみると、1980年に福島えびすグランドホテルで開催された第2回大会において、「比較文化における諸相」と題する初のシンポジウムが企画され、「比較文化」という共通の枠組みのなかで、さまざまな学問領域をこえた形での議論が可能であるかどうか模索された。その後、それぞれのシンポジウムでは、「文化」にかかわるさまざまなテーマがとりあげられてきたけれども、「比較文化（論）」を直接の議論の対象とする機会は、昨年の1995年のシンポジウムまで待たねばならなかった。このシンポジウムでは、「比較文化論再考」という形で、英語教育学、演劇学、翻訳論、歴史学の立場から、比較文化論を構築する際の方法論上の問題点を中心に話題が提供され、それをうけて、第18回大会では、「比較文化学の領域」と題して、それぞれの分野からさらに論点をしぼりこんだ議論が展開された。

2 D. Summers, *Longman Dictionary of English Language and Culture* (London: Longman, 1992) 254-5.

3 柴田良孝「比較文化論再考」『比較文化論』13 (1995): 4. (JACC第17回大会発表抄録.)

4 たとえば、石黒昭博「比較と対照」『比較文化会報』8 (1987)を参照。

5 これ以降、言語学とは、とくに断りがないかぎり、チョムスキーに代表される生成文法のパラダイムにもとづいたアプローチを指すことにする。

6 N. Chomsky, *Rules and Representations* (New York: Columbia University Press, 1980) 1.

7 *Ibid.* 4.

8 たとえば、チョムスキーは、“we may think of the study of mental faculties as actually being a study of the body—specifically the brain—conducted at a certain level of abstraction”と述べている。*Ibid.* 31を参照。

9 N. Chomsky, *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use* (New York: Praeger, 1986) 38.

10 厳密な意味での「抽象化」というレベルでいえば、言語学とブレインサイエンスにおいて、前者の目標が“to determine the properties of the initial state S_0 and each attainable state S_i of the language faculty”であるのにたいし、後者の目標は“to discover the mechanisms of the brain that are the physical realizations of these states”というように、

それぞれの究極の目標は異なっているといえよう。Ibid. 38を参照。

11 Ibid. 38-9.

12 N. Chomsky, *On the Generative Enterprise: A Discussion with Riny Huybregts and Henry van Riemsdijk* (Dordrecht: Foris, 1982) 10.

13 R.P. Botha, *Challenging Chomsky: The Generative Garden Game* (Oxford: Basil Blackwell, 1989) 202. なお、この点にかんする詳しい議論は、同書第4章を参照のこと。

14 人文科学の分野では、とりわけ、哲学との関連に言及しなければならないであろう。Chomsky (1982) では、言語学と哲学との相互作用は緊密で多岐にわたる旨が述べられている。チョムスキーによれば、その相互作用はさまざまな分野で生じていて、大別すると、(a) Vendler (1967) のように、言語学上の問題の解答を見つけるために言語学に頼ってきた研究、(b) 日常言語学派に属する Austin (1962) のように、ただたんに哲学者が言語学、もっと正確にいえば、フィロロジー (philology) をやっているというような研究、(c) 言語学における自然言語のモデル理論的意味論と同様に、意味論そのものとかかわっている研究、(d) 言語学における「説明」とはいかなるものかという問題のように、科学における方法論上の問題点にかんする哲学的研究、そして、最後に、今までの研究とはすこし異質なものとして、(e) 言語研究が認識論上の問題にどのように貢献しうるかを考究する研究にわけられている。このように、言語学と哲学は、一見すると、その接点において多岐にわたっているようにみえるけれども、両者の根本的な相違としては、方法論上の問題があげられる。(a) から (d) の研究に共通してみられるように、哲学の方法論は先験的なアプローチにもとづいているのに対し、言語学の方法論は経験的なものと考えられていて、その差異は両者の関連性を論じるにあたって決定的な差といえるものである。また、(e) にみられるように、言語研究を知識の本質、人間の知識の本質、アプリオリな知識の問題を研究するためのパラダイムとみなす研究は、言語学と哲学における認識論上の接点と位置づけることができるが、チョムスキーによれば、これらの研究に従事している哲学者はごく少数であり、言語学の外枠を規定するには、哲学が有効な役割をはたしているとはいいいがたい。詳しくは、N. Chomsky, *On the Generative Enterprise: A Discussion with Riny Huybregts and Henry van Riemsdijk*, 5-6 を参照。

15 R.P. Botha, 205.

16 Koerner (1995a) では、最初に言語研究の歴史を本格的に扱ったものとして、T. Benfey の名前があげられている。E.F.K. Koerner, "History of Linguistics: The Field," *Concise History of the Language Sciences: From the Sumerians to the Cognitivists*, ed. E.F.K. Koerner and R.E. Asher (Oxford: Pergamon Press, 1995) 3を参照。

17 Ibid. 4.

18 *Ibid.* 4-5.

19 *Ibid.* 5.

20 *Ibid.* 6.

21 ‘historiography of linguistics’ では、研究テーマの基本概念として、‘disciplinary matrix’ vs. ‘climate of opinion’ をはじめとし、‘continuity’ vs. ‘discontinuity,’ ‘evolution’ vs. ‘revolution,’ ‘mainstream’ vs. ‘undercurrent,’ ‘data-oriented’ vs. ‘theory-oriented’ などがとりあげられ、方法論上の問題としては、現実の言語慣習における強調点の推移にかんする問題、ある特定の枠組みやよりひろい時間的広がりの中での発展の諸相の同定化、ある特定の理論的枠組みの受容や拒絶における外的要因の役割などとともに、時代区分、文脈解読、研究手続きにかんする問題などがふくまれる。詳しくは、E.F.K. Koerner, “Historiography of Linguistics,” *Concise History of the Language Sciences: From the Sumerians to the Cognitivists*, 12-15 を参照。

22 当時のヨーロッパをとりまく言語学の状況をスウィート (H. Sweet) は “all of them liable to endless complications by analogical influences” と称して、一種の「停滞期」あるいは「混乱期」とみなしているのは興味深い。H. Sweet, *A New English Grammar: Logical and Historical* (Oxford: The Clarendon Press, 1891, 1952) iv.

23 F.J. Newmeyer, “Has There Been a ‘Chomskyan Revolution’ in Linguistics?” *Generative Linguistics: A Historical Perspective* (London: Routledge, 1996) 26.

24 たとえば、Newmeyer (1986, 1996) は、文法理論の本質についての見解が表明されている Chomsky (1957) およびそれ以降の研究においては、ソシュールの洞察が基本的に仮定されているため、チョムスキーを「構造主義者」とよぶのにじゅうぶんな根拠があることである旨を述べている。*ibid.* 26を参照。

25 同様の指摘が、興津 (1976) においてもなされている。つまり、研究方法の発達過程のなかに、かならず異質的もしくは対照的な研究方向が生じることがあり、それらの研究方法の交替は必然的な関連性の累積的結果として生じたものであることが指摘されている。さらに、研究の全体的動向または大転換は、容易には把握しがたいとする彼の見解は、同時代的で静的な視点からだけではなく、巨視的で動的な視点からの検討が必要であるとする本稿の主張をいっそう強化するものである。興津達朗『言語学史』(東京：大修館, 1976) 69を参照。

26 エウジェニオ・コセリウ『一般言語学入門』下宮忠雄訳 (東京：三修社, 1979) 4-7を参照。

27 *Ibid.*, 8を一部改変。

28 従来、1957年に出版されたチョムスキーの *Syntactic Structures* によって、言語学は「チョムスキー革命」を経験したというのが定説であり、チョムスキーと学説をあいられない研究者でさえもチョムスキーの影響を革命的なものともなしてきた。しかし、他方で、Koerner (1983) や Murray (1980) などのように、従来の見解に異論

を唱える研究者も増えつつあるのも事実である。いずれにしても、どちらの立場をとるにせよ、ここ数年で、George (1989), Botha (1989), Kasher (1991), Harris (1993), Matthews (1993), Haley & Lunsford (1994), Huck & Goldsmith (1995), Oterro (1994), Newmeyer (1996) などの研究書があいついで出版され、チョムスキーおよび生成文法にたいしての言語思想史的な総括の時期をむかえているのは間違いないであろう。29 Chomsky (1986) では、“‘generative’ means nothing more than ‘explicit’”とまで明言している。N. Chomsky, *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*, 3を参照。

30 R.P. Botha, 2.

31 N. Chomsky, *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*, 3. チョムスキーは、みずからの立場を明確にするため、同様の議論を Chomsky (1988a) や Chomsky (1991) においてもくりかえし述べている。たとえば、N. Chomsky, *Language and Problems of Knowledge: The Managua Lectures* (Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1988) 3-8および N. Chomsky, “Linguistics and Adjacent Fields: A Personal View,” *The Chomskyan Turn*, ed. A. Kasher (Oxford: Basil Blackwell, 1991) 3-24を参照。

32 R.P. Botha, 6.

33 Cf. *ibid.* 10.

34 F.J. Newmeyer, “Rules and Principles in the Historical Development of Generative Syntax,” *The Chomskyan Turn*, ed. A. Kasher, 201.

35 *Ibid.* 201.

36 *Ibid.* 201.

37 *Ibid.* 201.

38 Newmeyer (1991) は、同様の趣旨として、“transformations had become little more than a new descriptive device”あるいは“transformational grammar had become little more than descriptive linguistics with a transformational veneer”と述べている。*Ibid.* 205, 207.

39 初期生成文法の対案として、生成意味論を生成文法の理論的發展上に位置づけるべきがどうかについては、Maclay (1971) は、生成意味論と生成文法が、その理論的枠組みおよび方法論において、同じものであると評価しているのにたいし、Dougherty (1994) は、両者は理論的枠組みでは同じであるが、その方法論は軌を一にするものではなく、生成意味論は、どちらかといえば、アメリカ構造主義的な方法論を踏襲しているものと考え、“GS (=Generative Semantics) can be thought of as the result of applying pregenerative methods to justify theories with a generative flavour (226)”とみなしている。詳しくは、H. Maclay, “Overview,” *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology*, eds. D.D. Steinberg and L.A. Jakobovits (Cambridge: Cambridge University Press, 1971) 157-182 および R.C. Dougherty, “Generative Semantic Methods: A Bloomfieldian Counterrevolution,” *Noam Chomsky:*

Critical Assessments, Volume I: Linguistics: Tome I. ed. C.P. Oterro (London: Routledge, 1994) 221-249を参照。

40 たとえば, Chomsky (1988b) では, “government and binding theory” という用語が誤解を招きやすいので, “principles and parameters theory” を用いるとする旨が述べられている。N. Chomsky, “Transformational Grammar: Past, Present and Future,” *Generative Grammar: Its Basis, Development and Prospects, Studies in English Linguistics and Literature* Special Issue (1988): 55, 58.

41 チョムスキーによる一連のさまざまな提案は, 基底形からできる最小限の規則によって表層形を派生させる試みと位置づけられるが, 最近では, 言語分析において当然視されていた「派生」という概念そのものをゆるがしかねない代案が提出され, 注目を集めている。これは「最適性理論 (Optimality Theory)」とよばれるもので, 言語記述における規則および派生をまったく破棄し, 表層形の適格性を規定する制約だけで言語分析をおこなおうとする理論である。この理論の優劣については, 現在のところ, チョムスキーらとのあいだで激論がかわされているが, 音韻論研究をはじめとして, さまざまな言語研究に応用され, その適否が検証されつつある。この理論が, 本稿のテーマである言語理論の交替という観点からどのように位置づけられるかは, 今後の課題のひとつであろう。なお, この理論についての簡潔な解説として, 窪菌 (1996a, 1996b, 1996c) が有益である。

参考文献

- Arens, H. *Sprachwissenschaft: Der Gang ihrer Entwicklung von der Antike bis zur Gegenwart*. Freiburg: Karl Alber, 1955.
- Asher, R.E. ed. *The Encyclopedia of Language and Linguistics*. Vol. 2. Oxford: Pergamon Press, 1994.
- Benfey, T. *Geschichte der Sprachwissenschaft und orientalischen Philologie in Deutschland seit dem Anfange des 19. Jahrhunderts, mit einem Rückblick auf die früheren Zeiten*. Munich: J.G. Cotta, 1869.
- Botha, R.P. *Challenging Chomsky: The Generative Garden Game*. Oxford: Basil Blackwell, 1989.
- Bright, W. ed. *International Encyclopedia of Linguistics*. New York: Oxford University Press, 1992.
- Chomsky, N. *Syntactic Structures*. The Hague: Mouton, 1957.
- . *Current Issues in Linguistic Theory*. The Hague: Mouton, 1964.
- . *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1965.

- . *Cartesian Linguistics: A Chapter in the History of Rationalist Thought*. New York: Harper & Row, 1966.
- . “Remarks on Nominalization,” *Readings in English Transformational Grammar*. R. Jacobs and P. Rosenbaum. eds. Waltham, Mass.: Ginn, 1970.
- . “Conditions on Transformations,” *A Festschrift for Morris Halle*. S. Anderson and P. Kiparsky. eds. New York: Holt Rinehart & Winston, 1973.
- . *Rules and Representations*. New York: Columbia University Press, 1980.
- . *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris, 1981.
- . *On the Generative Enterprise: A Discussion with Riny Huybregts and Henry van Riemsdijk*. Dordrecht: Foris, 1982.
- . *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*. New York: Praeger, 1986.
- . *Language and Problems of Knowledge: The Managua Lectures*. Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1988a.
- . “Transformational Grammar: Past, Present and Future,” *Generative Grammar: Its Basis, Development and Prospects, Studies in English Linguistics and Literature* Special Issue 1988b.
- . “Some Notes on Economy of Derivation and Representation,” *MIT Working Papers in Linguistics* 10 1989. Also in Freidin (1991) and Chomsky (1995).
- . “Linguistics and Adjacent Fields: A Personal View,” *The Chomskyan Turn*. A. Kasher. ed. Oxford: Basil Blackwell, 1991a.
- . “Linguistics and Cognitive Science: Problems and Mysteries,” *The Chomskyan Turn*. A. Kasher. ed. Oxford: Basil Blackwell, 1991b.
- . “A Minimalist Program for Linguistic Theory,” *MIT Occasional Papers in Linguistics* 1 1992. Also in Hale and Keyser (1993) and Chomsky (1995).
- . *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1995.
- コセリウ, エウジェニオ. 『一般言語学入門』 下宮忠雄訳. 東京: 三修社, 1979.
- Delbrück, B. *Einleitung in das Sprachstudium: Ein Beitrag zur Methodik der vergleichenden Sprachforschung*. Leipzig: Breitkopf & Härtel, 1880.
- Dougherty, R.C. “Generative Semantic Methods: A Bloomfieldian Counterrevolution,” *Noam Chomsky: Critical Assessments, Volume I: Linguistics: Tome I*. C.P. Otero. ed. London: Routledge, 1994.
- George, A. ed. *Reflections on Chomsky*. Oxford: Basil Blackwell, 1989.
- Freidin, R. ed. *Principles and Parameters in Generative Grammar*. Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1991.
- Hale, K. and S.J. Keyser. *View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*. Cambridge, MA: The MIT Press, 1993.

- Haley, M.C and R.F. Lunsford. *Noam Chomsky*. New York: Twayne, 1994.
- Harris, R.A. *The Linguistics Wars*. Oxford: Oxford University Press, 1993.
- Huck, G.J. and J.A. Goldsmith. *Ideology and Linguistic Theory: Noam Chomsky and the Deep Structure Debates*. London: Routledge, 1995.
- 石黒昭博. 「比較と対照」『比較文化会報』 8 1987.
- Kasher, A. ed. *The Chomskyan Turn*. Oxford: Basil Blackwell, 1991.
- Katz, J.J. and P. Postal. *An Integrated Theory of Linguistic Descriptions*. Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1964.
- Koerner, E.F.K. 1974. "Purpose and Scope of *Historiographia Linguistica*," *Historiographia Linguistica* 1 1 1974: 1-26.
- . "The 'Chomskyan Revolution' and Its Historiography: A Critical Remarks," *Language and Communication* 7 1983: 147-69.
- . "History of Linguistics: The Field," *Concise History of the Language Sciences: From the Sumerians to the Cognitivists*. E.F.K. Koerner and R.E. Asher. eds. Oxford: Pergamon Press, 1995a.
- . "Historiography of Linguistics: The Field," *Concise History of the Language Sciences: From the Sumerians to the Cognitivists*. E.F.K. Koerner and R.E. Asher. eds. Oxford: Pergamon Press, 1995b.
- . and R.E. Asher. eds. *Concise History of the Language Sciences: From the Sumerians to the Cognitivists*. Oxford: Pergamon Press, 1995.
- 窪菌晴夫. 「派生か制約か—最適性理論入門 [上] 制約理論の台頭」『言語』 25 4 1996a: 84-91.
- . 「派生か制約か—最適性理論入門 [中] 生成文法と最適性理論」『言語』 25 5 1996b: 85-92.
- . 「派生か制約か—最適性理論入門 [下] O T の発展と課題」『言語』 25 6 1996c: 94-101.
- Maclay, H. "Overview," *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology*. D.D. Steinberg and L.A. Jakobovits. eds. Cambridge: Cambridge University Press, 1971.
- Mandelbrot, B.B. *Fractals: Form, Change, and Dimension*. San Francisco: Freeman, 1977.
- Marr, D. and H.K. Nishihara. "Visual Information Processing: Artificial Intelligence and the Sensorium of Sight," *Technology Review* 81 1 1978.
- Matthews, P.H. *Grammatical Theory in the United States from Bloomfield to Chomsky*. Cambridge: Cambridge University Press, 1993.
- Murray, S.O. "Gatekeepers and the 'Chomskyan Revolution.'" *Journal of the History of the Behavioral Sciences* 16 1980: 73-83.

- Newmeyer, F.J. *Linguistic Theory in America: The First Quarter-Century of Transformational Generative Grammar*. New York: Academic Press, 1980.
- . *The Politics of Linguistics*. Chicago: The University of Chicago Press, 1986a.
- . "Has There Been a 'Chomskyan Revolution' in Linguistics?" *Language* 62 1986b: 1-18. Also in Newmeyer (1996).
- . ed. *Linguistics: The Cambridge Survey I, Linguistic Theory: Foundations*. Cambridge: Cambridge University Press, 1988a.
- . ed. *Linguistics: The Cambridge Survey II, Linguistic Theory: Extensions and Implications*. Cambridge: Cambridge University Press, 1988b.
- . ed. *Linguistics: The Cambridge Survey III, Language: Psychological and Biological Aspects*. Cambridge: Cambridge University Press, 1988c.
- . "Rules and Principles in the Historical Development of Generative Syntax," *The Chomskyan Turn*. A. Kasher. ed. Oxford: Basil Blackwell, 1991. Also in Newmeyer (1996).
- . *Generative Linguistics: A Historical Perspective*. London: Routledge, 1996.
- 興津達朗. 『言語学史』東京: 大修館, 1976.
- Otero, C.P. ed. *Noam Chomsky: Critical Assessments, Volume I: Linguistics: Tome I*. London: Routledge, 1994a.
- . ed. *Noam Chomsky: Critical Assessments, Volume I: Linguistics: Tome II*. London: Routledge, 1994b.
- . ed. *Noam Chomsky: Critical Assessments, Volume II: Linguistics: Tome I*. London: Routledge, 1994c.
- . ed. *Noam Chomsky: Critical Assessments, Volume II: Linguistics: Tome II*. London: Routledge, 1994d.
- Postal, P.M. *Cross-over Phenomena*. New York: Holt, Rinehart & Winston, 1971.
- Ross, J.R. "Constraints on Variables in Syntax." Ph.D. dissertation. MIT, 1967.
- 柴田良孝. 「比較文化論再考」『比較文化論』13 1996: 4. (JACC第17回大会発表抄録)
- Steinberg, D.D. and L.A. Jakobovits. eds. *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology*. Cambridge: Cambridge University Press, 1971.
- Summers, D. *Longman Dictionary of English Language and Culture*. London: Longman, 1992.
- Sweet, H. *A New English Grammar: Logical and Historical*. Oxford: The Clarendon Press, 1891, 1952.
- Thompson, D.W. *On Growth and Form*. J.T. Bonner. ed. and abr. Cambridge: Cambridge University Press, 1961.
- Vendler, Z. *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, New York: Cornell, 1967.

Synopsis

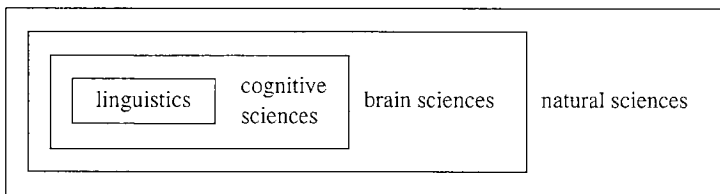
The Methodology of “Comparison” Reconsidered: Contribution of Linguistics towards the Further Development of the Comparative Studies of Cultures

Nobuyuki Yamauchi

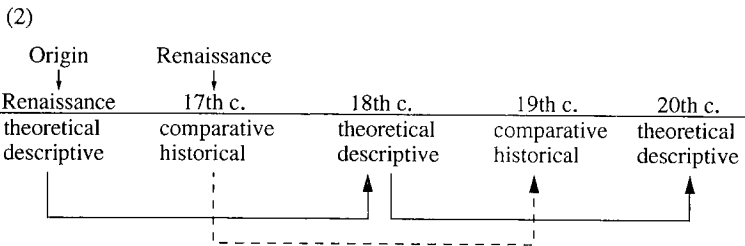
This paper is an attempt to consider how linguistics should contribute to the further development of the comparative studies of cultures. The key notion to be discussed, “comparison,” which is terminologically distinguished from “contrast” in the field of linguistics, will be capable of wider interpretation and three methodologies of “comparison” will be examined in the present study.

The first methodology deals with a comparison between different disciplines, i.e., between linguistics and its related academic fields. Assuming that linguistics is most closely related to natural sciences in terms of methodology, it follows that the frame of linguistics can be best characterized through the comparison with other natural sciences — psychology, cognitive sciences, brain sciences, biology and so on — and this claim is also confirmed by official statements and private comments of Chomsky’s own in the literature. The following diagram (1) serves to illustrate the location of linguistics in natural sciences:

(1)

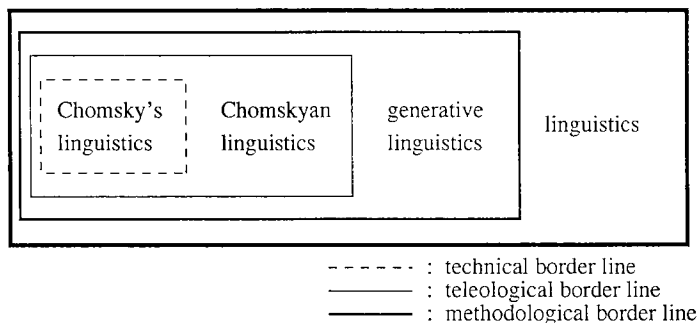


The second methodology is concerned with a comparison from a diachronic viewpoint, i.e., a historical consideration of the development of linguistic theories, especially during the period from the 19th through the 20th century. Given a newly devised approach, historiography of linguistics, which is proposed by Koerner, it proves of great use to bring the new light of dynamic comparison to bear on the teleological and methodological developments in linguistic theories. This approach, far from a static or contemporary viewpoint of criticism, reveals that there occurs an alternation in linguistic theories between the comparative-historical and the theoretical-descriptive during a span of the 19th and the 20th centuries, and that this alternation is also applicable to the whole span of our history, which is roughly outlined in the diagram (2):

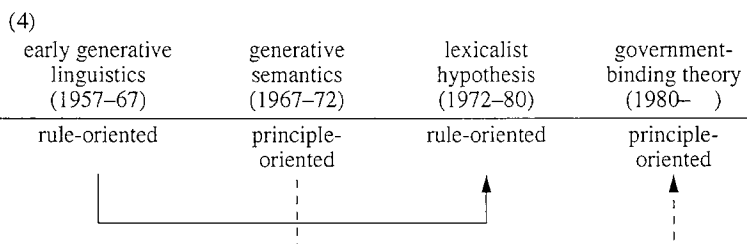


The third methodology explores where Chomsky's linguistics can be located in relation to Chomskyan linguistics, generative linguistics and so on, and suggests that there should also occur an alternation in the development of generative linguistics. The first task to be considered is to give a proper evaluation of Chomsky's linguistics, which can be achieved through a micro-comparison within generative linguistics. This micro-viewpoint includes three aspects: methodological, teleological and technical. The following diagram (3) will facilitate understanding of the proper location of Chomsky's linguistics:

(3)



This micro-approach also encourages a more cyclic interpretation of the history of generative linguistics. As Newmeyer (1991) suggests, an alternation between the rule-oriented and the principle-oriented approach can be observed within the development of generative grammar — from early generative grammar through generative semantics and lexicalist hypothesis to government-binding theory. The rule-oriented focuses on proposing, motivating or arguing against the existence of language-particular, while the principle-oriented leads toward motivating principles of universal grammar. With one approach alternating with the other as a cumulative counterproposal, the theoretical development of generative linguistics is assumed to converge on the construction of UG, aiming to pursue further explicitness and simplicity in the linguistic description on the levels of rules (or principles), derivation and representation. Taken together, the alternation phenomena along with these arguments can be roughly schematized as follows:



Three different kinds of comparison proposed so far clearly help to externalize and internalize linguistics and linguistic theories. The second and third methodology assert, moreover, that an alternation of linguistic paradigms can be found in both a macro- and a micro-history of the development of linguistic theories, just as in that of scientific theories in general. It is to be concluded that this essential combination of a dynamic and a static view of comparison can contribute to providing a guiding principle in the orientation of linguistics and linguistic theories and, hopefully, further developing the comparative studies of cultures.